

# マアジ資源新規加入量調査

(資源評価調査)

佐々木正・村山達朗

## 1. 研究目的

本県のまき網漁業や定置網漁業の主要な漁獲対象種であるマアジの資源評価を迅速に行うため、関係機関と共同で中層トロール網を使用した試験操業を実施し、日本海南西海域におけるマアジ幼稚魚の分布状況と分布量の推定を行うとともに同海域へのマアジ新規加入量の推定を行う。

## 2. 研究方法

本研究ではこれまで関係機関（鳥取県水産試験場、日本海区水産研究所、西海区水産研究所）と共に一斉調査を5月後半～6月前半に実施し、その結果を基に新規加入量の推定を行っている。しかし、昨年度および一昨年度本県が実施した調査においては6月前半よりも6月後半～7月前半の方がマアジの採集数が多くなる結果となった。このことから、新規加入量の推定を行うに当たり、稚魚の来遊盛期を再検討する必要があると考えられたことから、これまでと同様の一斉調査に加えて調査時期を7月まで延長して実施することとした。また、4月下旬に浜田地区の定置網においてマアジの幼稚魚のまとまった入網がみられたことから5月にも調査を追加して実施した。

島根県西部沖から山口県沖に3本、福岡県沖に2本の計5本の調査ラインを設定し、各線上で定められた定点（1線につき3点）において中層トロール漁具を用いてマアジ幼稚魚の採集を行った。調査は5月に1回（21～23日）、6月に2回（前半：4～6日、後半：26～28日）、7月に1回（18～20日）の計4回実施した。6月前半の調査については一斉調査の一環として島根県西部沖から山口県沖の調査ラインで調査を実施し、得られた結果について関係機関と共同で解析してマアジの来遊量指数を算出した。

5月の調査は島根県西部沖から山口県沖の調査ラインにおいて、6月後半および7月の調査は全ての調査ラインで調査を実施した。なお、6月前期の福岡県沖については、ほぼ同じ時期に同海域で西水研により実施された採集結果を比較のために参考資料として用いた。

中層トロール網の曳網水深は20～50mとし、曳網速度は3ノット、曳網時間は30分間とした。

## 3. 研究結果

一斉調査の結果を解析したところ、加入量指数（加入量の多かった平成15年を1とする）は0.48となり、平成15年よりは依然として低いものの、前年（加入量指数0.26）よりはやや高い水準にあったと推定された。

採集時期別のマアジ幼稚魚の採集密度（1曳網当たり採集尾数）は、島根県西部沖から山口県沖においては5月15尾、6月前半133尾、6月後半57尾、7月5尾となり来遊盛期は6月前半であったと推定されたが、福岡県沖においては6月前半6尾、6月後半199尾、7月6尾となり来遊盛期は6月後半であったと推定され、調査海域により異なる結果となった。これまでの3年間の調査結果からマアジの幼稚魚の来遊盛期は6月～7月前半の範囲にあり、年や海域によって来遊盛期が異なることが判明した。しかし、一斉調査の実施時期と来遊盛期を一致させることは実際には困難であることから、調査は概ね6月中に実施すれば大きな問題は無いと考えられた。

## 4. 研究成果

研究結果から推定されたABCをもとに、マアジのTAC（漁獲可能量）が設定された。